

所属	生涯福祉研究科 生涯福祉専攻 修士課程	修了年度	平成24年度
氏名	窪江 怜美	指導教員	谷田貝 公昭

論文題目	幼児の運動能力の生活的側面について—過去約45年前との比較—
------	--------------------------------

本文概要

I. 研究目的

本研究は、今日の幼児が生きる上で必要な動作、自然と行う動き、生涯に関わってくるからだの動きを意味する「運動能力」がどの程度できるかを明らかにし、「保育学年報(1963年版)」(日本保育学会、1963)にある運動発達についての結果と比較をする。

II. 研究方法

実施地域は、関東圏の保育所12か所、幼稚園10か所の全22か所であり、対象の属性は、3~6歳児(年少児から年長児)についてである。実施回答者は、3~6歳児(年少児から年長児)を持つ保護者であり、質問紙を使用し、「対象児の年齢・性別・身長・体重・幼児の基本的運動能力の25項目・運動遊びの8項目」を回答してもらう。実施時期は、2012年6月初旬~7月下旬に行い、配布から回収まで、1園1~2週間を設けた。

III. 結果と考察

過去の幼児と現代の幼児を比較していくと、現代の幼児よりも、過去の幼児の方ができる割合が高い項目が多くあった。ちなみに過去の項目の方が高いものは、25項目中15項目となっている。

また、現代の幼児ができていない項目は、大きく分けて2つに分けられる。1つ目は「生活する上で身の回りで行う動き」であり、靴下をはくことやうがいや歯磨きという項目のことである。2つ目は「見て真似て描くこと」で、図形を真似て描く項目のことである。からだを思いっきり使うことよりも室内で静かに行えるような動きを現代の幼児は得意としていることが言える。

現代の幼児は、生活する上で必要である運動能力も低下していることが明らかになった。幼児のからだの使い方やコントロール、手先の不器用さが浮き彫りになり、通過年齢が上がってきている。便利な道具に助けられ、確保すべき運動量が低下してきていることが原因だと言えるだろう。運動遊びを通して、からだの使い方を知ることができるため、幼児期にどのように過ごすかが、今後の児童期や青年期といった成長に大きな影響を与えてしまうだろう。

IV. まとめ

遊ぶ場所の限られてきている現代の幼児たちが、安全に思いっきり運動遊びを行うためには、保育所、幼稚園での遊びの広がり考えた環境の提供であり、確保である。また、保護者に向けて、幼児の運動能力の低下について現状を知ってもらい、一緒にからだを使った遊びを発信していく。園の方だけで行っても、意味がないのである。運動させなくとも、問題ないと感じる保護者もいるだろう。しかし、長い目で見たときに幼児期に培わなかったがために幼児の秘めた力が成長しきれなかったということにつながるかもしれない。どれだけ大事な時期であるか、改めて考えてもらう様にしていくことが必要なのである。

今後の課題として、幼児の運動能力向上の具体的な対策法を考えていくことが挙げられる。例えば、室内でも簡単にできる運動遊びの開発や短時間で行えるからだを使った遊びなど、現代にあったものを考えていかなければならないだろう。